東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

日本語の論理再考：場所の論理と形式論理

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡,智之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108132

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　62: 365－373，2011.

日本語の論理再考

――場所の論理と形式論理――

岡　　智之*

留学生センター

（2010年9月27日受理）

はじめに

本稿では，「日本語の論理の基本は，場所の論理である」ということを主張する。まずは，論理として，「主語論理と述語論理」「主体の論理と場所の論理」があることを述べ，その思考方式について詳しく述べる。そして，最近の日本語の論理に関する論考である月本（2009）の「日本語の論理の基本は，命題論理，すなわち形式論理である」という主張を批判的に検討し，日本語の論理について再考してみたい。

1．主体（主語）の論理と場所（述語）の論理

一般に理解されている論理というのは，アリストテレスに始まる古典論理であり，それが現代の形式論理学につながっている。これに対し，西田幾多郎は，判断の形式から出発し，従来は主語中心であったものを，逆方向で述語中心に考えるべきであるとして「述語の論理」＝「場所の論理」を提唱した。本稿では，積極的にこれを支持し，場所の論理の有効性を主張したい。

まず，城戸（2003）にしたがって，主語論理と述語論理，主体の論理と場所の論理について概略する。

まず，論理というのは，ある何かと何かの関係の表現であり，関係が生まれるためには，個々の主体や客体（「存在者」）と，それが存在する場所（「所在」）とが互いに分離することが必要であるという。「所在」というのは，「存在者が存在する概念的位置または空間的もしくは時間的位置」のことであり，広い意味で，その「存在者」の述語に相当する部分である。「主語論理」とは，個々の主体または客体（存在者）から出発し，そうした主体または客体がおかれている所在＝場所＝述語をその主語に属する性質として論じる論理である。たとえば，「太陽は輝く」という文では，太陽という主語が輝くという性質を有すると考える。太陽という主語がまずあって，この主語に包摂されるものとして輝くという性質を述定するのである。これに対し，「述語論理」は，所在＝場所＝述語から出発し，その場所において包み込まれる主体や客体（存在者）について論じる論理である。例えば，「輝く」という所在＝場所から出発し，輝くものが包摂するものを同一のものとして論じるのである。主語論理からすれば，女性と太陽は，主語，主体としては明らかに異なるものである。しかし，輝くという述語的同一性のもとで見るならば，女性も太陽も輝くものであり，「太陽は輝く」，「女性は（男性にとって）輝く」故に，「女性は太陽である」という結論を導く。一般にメタファー（隠喩）は述語論理に従っている。述語論理は，言語以前のイメージ的同一性を重視する論理である。また，述語論理は主語論理よりも基底的，根底的な論理であり，意識を形成するのが主に主語論理であるとすれば，無意識を形成しているのは主に述語論理なのであるとする。「主語論理」と「述語論理」は主に判断の形式から出発して導き出されたものであるが，それを広く見るならば，「主語論理」は「主体の論理」に含まれ，「述語論理」は「場所の論理」に含まれる。

「論理は思考の形式である」とすると，「主体の論理」と「場所の論理」に対応するそれぞれの思考方式が存在するだろう。それを「主体的思考」「場所的思考」とする。城戸（2003）では，それらは具体的に下のような形で二項対立的に把握することができるとしている。（実際は⑳まであげられているが，⑧までにしておく。）

＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

表１　場所的思考と主体的思考（城戸2003：119-120）

	場所的思考に属する思考	主体的思考に属する思考
①	非言語的	言語的
②	実践的	理論的
③	レトリック	ロジック
④	帰納法	演繹法
⑤	経験論	合理論
⑥	こと（事）	もの（物）
⑦	イメージ	概念
⑧	右脳的	左脳的

これらを城戸に従いながら説明していく。

① 非言語的と言語的は，⑦のイメージと概念と関係してくる。すなわち，イメージは非言語的であり，概念は言語的である。イメージ的同一性から概念が生まれる。たとえば，「犬」という概念は，「ワンワンほえる動物」をたくさん見て，それから作られるイメージ的同一性に基づいて，作り出されるのである。これは認知言語学でいう，カテゴリー化ということとも関係している。

② 実践的と理論的は③と関係してくるが，レトリックは人を動かす説得術として発展したものであり，きわめて実践的なものである。これに対し，ロジックはまさに理論的なものである。

③ レトリックとロジック…レトリックは，具体的なものを通しての場所的同一性に基づく説得であって，基本的に場所の論理に基づくものである。レトリックは，主語論理的には非論理的だが，述語論理的には十分論理的根拠を持っているものである。レトリックのうち，隠喩は，異なるものの中に同一性を見いだす思考方式であり，主語的に異なるものが場所的（述語的）に同一性を見いだすときに使用される表現形式である。また，換喩は，近接関係に基づく連合関係であり，言語以前の動物にも見られる推論形式であるという。

④ 帰納法と演繹法…帰納法は，人間の五感によって捉えられる個々のケースから出発し，そこから一般的な真理あるいは概念に到達する推論で，述定される場所的同一性に基づく推論形式である。一方，演繹法は，形式論理の三段論法に見られるような命題の必然的結果を導き出す推論であり，主語的論理に基づいた推論である。また，城戸ではあげられていないが，パースによって定式化されたアブダクション（仮説推論）は，規則と所与の結果から文脈を参照して事例に関して行う推論であり，これも一種の述語論理的推論（帰納法よりも高次の推論であろう）であると考えられる。アブダクションは，説明のための仮説を主体的，創造的に作り上げるプロセスであり，認知心理学や人工知能などにおいて仮説形成，自然言語処理のプロセスとして研究されている（辻編2002：4，米盛2007[1]）。帰納法やアブダクションに見られる推論方式はきわめて実践的であり，述語論理は日常的にも有効な論理と考えられるべきである。

⑤ 事と物…主語論理は，実在するのは物であり，その物が主体となり，これを述定するのが言語であると理解する。これに対し，場所の論理では，あるのは動的な現実であり，その現実は，物によって構成されているのではなく，事によって作られていると考える。本来は「こと」があり，この「こと」を分析的に見ることによって，初めて「もの」が見えてくるのであって，その逆ではない。物を中心とする世界観はモノ的世界観であり，事を中心とする世界観はコト的世界観である。英語の基本的見方は，モノ的であり，日本語では，コト的であることが池上（2000）などでも指摘されている。

⑥ イメージと概念…イメージとは，ことばと概念の形成に先立って存在する心的表象である。「稲妻の光とものすごい落雷音」という身体経験に基づいて，そのイメージが作られ，それを主語的に統一するものとして「雷」という言語が形成される。イメージは動物も持つが，概念を動物が持つかはよくわからない。基本的には，イメージは言語以前の（動物も持つ）表象であり，概念は言語によって形成されると考えておく。イメージ的同一性に基づく論理が述語論理であり，「概念」や「ことば」による主語的同一性に基づく論理が主語論理である。ここで，認知言語学で言うイメージ・スキーマの位置づけを考えておこう。イメージ・スキーマは，種々の身体経験をもとに形成されたイメージを，より高次に抽象化・構造化した知識形態とされる。日常的な食べたり，出したりという行為や部屋を出入りするというような身体経験が，身体を容器のようなものとイメージさせ，容器のイメージ・スキーマが形成される。イメージ・スキーマは，メタファーの認知的基盤になることから，述語論理的思考が関係していると考えられる。（単なるイメージ的同一性による推論よりもより高次の推論において使われるものと思われる。）

⑦ 右脳的思考と左脳的思考…ヒトにおいては，左

脳では言語的思考が優位に行われ，反対の右脳では非言語的な機能が優位に営まれている。一般に左脳的思考は主体的思考，右脳的思考は場所的思考に関係していると言えるだろう。月本（2008：206）では，右脳に損傷がある子供は，通常のことばは理解できるが，ジェスチャーができないとか比喩が理解できないという報告をあげている。ジェスチャー自身は思考ではないが，ことばのイメージ的表現に近いし，比喩は場所的思考であることからも，右脳思考が場所的思考に関係していることが伺える。そして，この右脳を経由して，左脳でことばを処理できるようになるという事実は，主体的思考が場所的思考に基づいていることを証明しているものではないだろうか。

このように，主体的思考と場所的思考は二項対立的に存在すると共に，相補的関係であるとも言える。場所的思考が基底的で，主体的思考があるという関係である。そして，これら場所的思考と主体的思考が形式化されたものが，「主体の論理」と「場所の論理」となるのである。

これらの論理が，現実の言語現象にどう現れているかまず，確認しておこう。次のような a，b のような対比があったとき，言語によってどちらをより自然な使い方として，見るかである。

a．風が窓をひらいた。（主体－対象－動作）
　＜主語－目的語－他動詞＞
b．風で窓がひらいた。（場所－出来事）

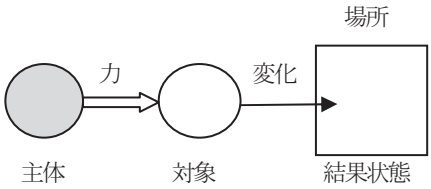

図１　他動詞構造

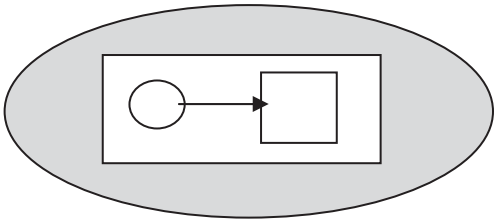

図２　場所で出来事が起こる

英語や中国語などの言語では，a のような言い方が自然であり，日本語や朝鮮語のような言語では，b のような言い方が自然であるという。a の「風」のような無生物を主語にすることは日本語では，「擬人法」のように特別な効果を生む場合のほかは，普通の発話では使いにくい。この言い方を自然とする言語は，「無生物」をも主語にする「主語の論理」，「主体の論理」が強い言語であろう（図１）。一方，b で，「風で」の「で」は一般には「原因」と解釈されるが，ここでは「風の中で」というように場所的にも解釈できるであろう。すなわち，「風の中で，「窓がひらく」という出来事が起こった」という解釈ができる（図２）。まさに，「場所において，コトがナル」という事態認識であり，こうした言い方を自然とする言語は，「場所の論理」が強い言語であるといえるだろう。

ここで注意すべきは，「場所と主体（個体）」の関係は，どちらがなくても，あり得ない相補的関係であるということである。「存在物」だけあって，それがある「場所」がないと言うことはあり得ないと同時に，「場所」だけあって，「個体」がないというのは，空虚な空間，無でしかないであろう。現実には，両者は相補的関係にあるものである。ただ，「場所の論理」の方が根源的であり，それを基盤として「主体の論理」があることはいえるだろう。

これを日本語と英語の場合で，図式的に書けば次のようになるのではないかと思われる。

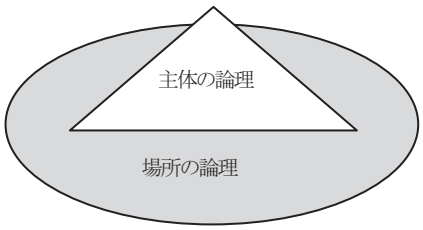

図３　英語の論理

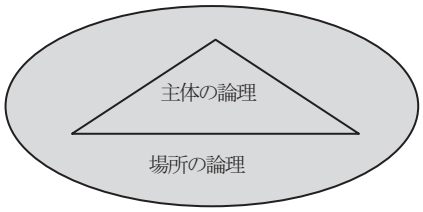

図４　日本語の論理

英語では，主体の論理が強く，主体は場に独立した形で存在する。それゆえ，言語構造としては主語を必要とし，事態の基本型はスル型（主体－対象－他動

詞），事態把握としては，主体が場の外から見る客観的把握である。

一方，日本語では，場所の論理が強く，主体は場に依存して場に埋め込まれた形で存在する。それゆえ，言語構造としては主語を必要とせず，事態の基本型はナル型，事態把握は場の中に視点を持つ主観的把握である。

安藤（1986）も，西欧と日本の文化の型の対立として，次のようなものをあげている。「個の論理vs.集団の論理」，「２元論的vs.全体観的思考様式」，「積極的vs.消極的な行動様式」，「自己主張の文化 vs. 自己滅却の文化」，「人間関係の非連続vs.連続」，「人間と動物の非連続 vs. 連続」，「征服すべき自然 vs. 服従すべき自然」。それらは一口に「個の論理 vs. 集団の論理」と言ってもいいとしているが，これはまさに，「主体の論理」と「場所の論理」と並行的に捉えられるものである。結局，日本語の論理は基本的に場所の論理であり，英語の論理は基本的に主体の論理であるといっていいであろう。

２．日本語の論理は形式論理であるか？

２．１　日本語特殊説について

月本（2009）の主張は，「日本語は論理的であり，その日本語の論理は特殊でもない。日本語の論理は形式論理と同等である」というものである。まず，「日本語は非論理的である」という説は，月本氏と同じく誤っていると考えるし，「日本語の論理は特殊ではない」という主張も賛成である。しかし，「日本語の論理は形式論理と同等である」という主張には，疑問がある。

まず，月本氏は，西田幾多郎や三上章が「日本語の論理は西欧の言語の論理とは違い，特殊である」と言っているとしているが，西田や三上自身は，「日本語は特殊である」とは一言も言っていないと思われる。西田の「場所の論理」は，形式論理学でいう判断の包摂関係（特殊（主語）が一般（述語）のうちに包摂されること，つまり，特殊が一般においてあること）から出発しているのであるから，これ自体は日本語に特殊な判断という意味で言っているのではなく，むしろ，西田自身，普遍的な判断として打ち出したかったように思われる。西田は，「場所」について，一方では，プラトンの「コーラ」（場），フッサールの「意識の野」，カントの「意識一般」などを通して考えており，他方では，道元の「古鏡」を通して考えているという（浅利2008：15）。つまり，西欧の形而上学を取り入れつつ，それを乗り越えて，より「普遍性」を目指す苦闘の中で，「場所」という概念に行き着いたのであって，それが日本語に特殊な論理と速断は下せないと思われる。ただ，浅利（2001）が，西田の場所のイメージは，日本語の助詞「で」の円のイメージに重なるものであり，これは日本語で考えたという事実に由来すると指摘しているが，西欧語で思考する西洋人が屈折語で思考するという制約にあったように，西田自身も日本語で思考するという制約下にあったことは事実である。思考は言語によって制約されるのである。

「日本語の論理と西欧の論理は違う」あるいは「日本語に独自の論理がある」という主張は，必ずしも「日本語は特殊である」という主張にはならない。そこには，「西欧の論理」が普遍的であるという前提があり，それと違うから特殊であるという結論が出てくるのではないか。言語類型論者の角田（1991）は，「日本語は特殊な言語ではない。しかし，英語は特殊な言語だ」といっているが，これを論理に適用すれば，「日本語の論理は特殊な論理ではない。しかし，英語の論理は特殊だ」という可能性もあるのである。英語の論理とは，後で述べる主語論理，あるいは主体の論理である。

それでは，具体的に，月本氏の論法について，検討していくことにする。

月本氏の論法は，次のようである。

① 論理は比喩の形式である。
② 日本語の論理の基本は容器の論理である。
③ 命題論理は容器の比喩の形式である。
④ ゆえに日本語の論理の基本は命題論理である，すなわち形式論理である。

結論的に言って，①は誤り，②は条件付き賛成，③は部分的賛成，④は反対である。これらの主張と論法に対してひとつずつ検討していく。

２．２「論理は比喩の形式である」か

月本氏はここでいう「比喩の形式」を比喩の持つ共通性，すなわちイメージであるとしている。しかし，「形式」と「イメージ」は同じであろうか。たとえば，「私の心は満たされない」というとき，心を容器に喩えているのであり，「心は容器である」という比喩が使われている。こうした，容器の比喩を形式化したものは，「X は容器である」という命題であろう。「比喩の形式」とは，「A は B である」という命題で言い表されるものではないだろうか[2]。月本氏は，「形式」と

「イメージ」を同一視しているが,「形式」と「イメージ」とは異なると考えられる。月本氏のいう「イメージ」は，認知言語学でいう「イメージ・スキーマ」に近いものと考えられるが，たとえば,「容器のスキーマ」とは，容器の中に何かがはいっているイメージをスキーマ化（形式化ではない）したものである。これは普通図示されるものであり,「形式」とは普通，命題や記号，式で言い表されるものではないだろうか。月本氏は,「比喩の形式」と「比喩のイメージ」を混同していると思われる。すなわち,「容器の比喩」とは,「X は容器である」と形式化できるものであるが，それと「容器のスキーマ」は異なる。厳密に言えば，日常生活における経験が「容器のイメージ・スキーマ」を形成し，それに基づいて,「容器の比喩」が生まれるのである。

また,「擬人の比喩」についても言及しているが,「擬人の比喩」とは，ものを人間に喩えるものであって,「台風が木を倒した」というような言い方は，日本語では，台風を人に喩えている「擬人の比喩」といえるが，この比喩の形式は「Xは人である」と形式化されるものである。月本氏は,「擬人の比喩」を「誰々が何々に対してこれこれをする」というものであり，その形式は,「主体－対象－動作」であるとしているが，それ自身は，他動詞の構造であって,「擬人の比喩の形式」ではないだろう。「波が踊っている」は，擬人の比喩であるが，他動詞構造ではなく,「主体－動作」の自動詞構造である。また,「山が不機嫌そうに見える」という言い方は,「主体－形容詞」の型である。「台風が木を倒した」のような他動詞構造を基本にする言語は,「主体の論理」が強い言語だと言えるし，ここでは擬人の比喩があるといっていいが,「擬人の比喩」＝他動詞構造＝主体の論理とはいえないだろう。

月本氏は「比喩の形式」は思考の形式である。「論理」も思考の形式である。ゆえに,「論理は比喩の形式である」と結論づけている。「比喩の形式」は思考の形式である，という大前提は「比喩を通して，思考している」という言い方でなら納得できるが,「形式」は余計である。この大前提を正しいとしても，この推論自体，古典論理の三段論法からすれば誤りである。典型的な三段論法は次のようなものである。

すべての人間は死ぬ。　（大前提）
ソクラテスは人間である。　（小前提）
故に，ソクラテス（S）は死ぬ。　（結論）

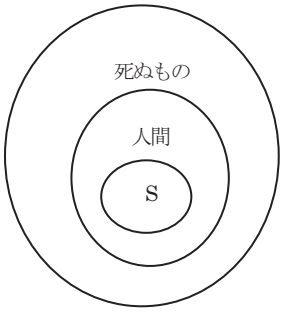

図５　三段論法の図式

古典論理では，図５のような包含関係が成立するからこそ,「ソクラテスは死ぬ」という結論が導き出されるのであるが，月本氏の論法は，古典論理では，図６のような図式になるので,「論理は比喩の形式である」という結論は導き出せない[3]。

比喩の形式は思考の形式である。　（大前提）
論理は思考の形式である。　（小前提）
ゆえに，論理は比喩の形式である。　（結論）

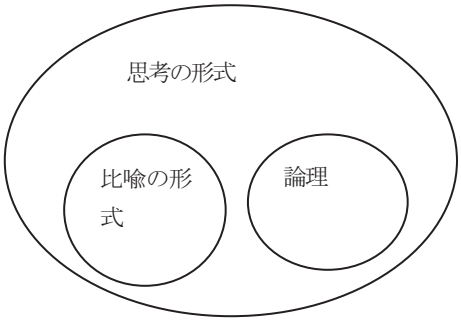

図６　「論理＝比喩の形式」ではない

月本氏は，容器の比喩の形式は「容器の論理」，擬人の比喩の形式を「主体の論理」と呼ぶとしているが，直感的に言っても,「比喩」と「論理」は別ものである。たとえば，比喩には,「容器の比喩」や「擬人の比喩」のほかにも,「建築の比喩」（理論の基礎）や「金銭の比喩」（豊かな想像力）等，色々あげられるが,「比喩の形式」と「論理」が同じであれば，その比喩の種類ごとに,「建築の論理」とか,「金銭の論理」とかの論理が立てられなければならなくなるだろう。したがって,「論理は比喩の形式である」という前提は誤りである。

２．３　「日本語の論理の基本は容器の論理である」か

月本氏は,「日本語の論理は人を場所で喩えることが多いことからもわかるように，空間の論理である」とする。そして，日本語の論理の中心的な事項は助詞

「は」であるとし，「は」が日本語の論理の基本であるとする。「は」は容器の比喩である。すなわち容器の論理である。ゆえに，「日本語の論理の基本は容器の論理である」とする。

前節での議論からすれば，「は」は，「概念的場」ということはできるが，それ自体は，比喩ではないだろう。厳密に言えば「X は Y」という構造が「X の中に Y がある」という容器のスキーマに基づいていると言うことであって，これ自体を「容器のメタファー」ということはできない。先に言ったように，「論理は比喩の形式である」とはいえないから，「は」自体を「容器の論理」と呼ぶことはできない。Lakoff や Johnson が，「容器のスキーマ」というのは，英語の「in」の構造を念頭に置いているものであろう。「in」はまさに「容器」のイメージを基にしているのであるから。しかし，日本語の「は」は，三次元的な「容器」のイメージだけでなく，二次元的な平面も表すし，「山田さんには，お金がたくさんある」（所有空間），「山田さんは韓国語が話せる」（可能空間），「私は，犬が怖い」（情意空間）など，もっと広義の「場」と言った方がいいイメージである。それゆえ，本稿では，「容器の論理」という用語は使わず，「場所の論理」という。ただ，「容器の論理」は，広義に言えば「場所の論理」であるとして，「日本語の論理の基本は場所の論理である」とすれば，この主張は支持できる。

月本氏は，日本語の論理の基本は容器の論理である。ただし，日本語の論理の中には，「主体の論理」もあるという。たとえば，「象が荷物を運んだ」の象は主体であり，これを空間の論理で書くのは無理がある，としている[4]。この場合，「主語−述語」の構造が考えられるので，「主体の論理」があるといっていいとしている。（ただこの場合，「象」は擬人の比喩ではない。）確かにこの場合，「象」を主語とし，「運んだ」を述語とする「主語−述語」関係で解釈できないこともない。つまり，主題のない無題文では，「主語論理」で解釈できる場合があるということは認められる。

月本氏は，一文法に二論理があるのであり，一つの論理だけでは図式化できないとしている。これを「日本語は空間の論理が多く，主体の論理が少ない。これに対して，英語は主体の論理が多く，空間の論理が少ない」すなわち，「日本人は空間の論理を多用し，主体の論理はあまり使わない。これに対して，英米人は主体の論理を多用し，空間の論理をあまり使わない」とまとめている。このこと自体は賛成である。筆者は，何も日本語に「主体の論理」がない，といっているのでも，英語に「場所の論理」がない，といっているのでもない。日本語にも，いい，悪いを問わず，「主体の論理」が入っていることは，認めよう。明治以来の，西洋文法を模範にした翻訳文体や「日本語文法」が否応なく，日本人に「主語の論理」を押しつけ，学校文法ですり込まれているのであるから，日本人の意識に「主語論理」や「主体の論理」がすり込まれているのは事実であり，これを否定しようはない。それでも，「日本語の論理は場所の論理が基本である」と言うことは変わらないであろう。また，「主体の論理」「主語論理」を基本とする英語のような言語でも，存在構文やセッティング主語構文のように，「場所の論理」で解釈できる文法現象も見られるのである。月本氏のように，「主体の論理」と「場所の論理」は，相互に排除的に対立した論理と言うより，言語ごとでその使われる割合が違うというような相対的な差でしかないという考えもできるであろう。

２．４　「日本語の論理の基本は命題論理である」か

③の主張であるが，命題論理における「かつ」「または」という接続関係や「でない」の否定関係は，すべてベン図を使った包含関係で図示できる。それゆえ，命題論理は「容器のスキーマ」に基づいているといえる。しかし，ここには「容器の比喩」自身は見られないのである。（「p かつ q」がベン図で示せたとしてもそれ自体は比喩ではない）だから，命題論理が「容器の比喩」に基づくとは言えない。

①「論理は比喩の形式である」という主張が誤りとした以上，「比喩の形式」という言葉は使わないことにするが，仮に③を「命題論理は容器の論理である」として，②と合わせて④の結論が導き出されるだろうか。

日本語の論理の基本は容器の論理である。
命題論理は容器の論理である。
故に，日本語の論理の基本は命題論理である。

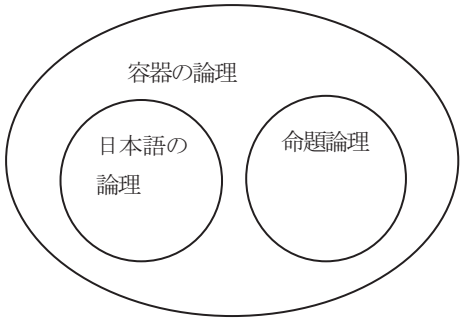

図７　「日本語の論理＝命題論理」ではない

この推論も三段論法からすれば誤りである。もしこれが三段論法的推論ではなく，「X は Y である」を X ＝Y という等号関係と考えてこのような結論を導き出しているとしても，「命題論理は容器の論理である」自体がそもそも誤りであるからこの推論自体が誤りになるのである。

命題論理は日本語の接続詞の規則に基づいて作られているものであるから，日本語で命題論理が扱えるのは当然のことである。それゆえ，「命題論理は，日本語の論理に合致する」とは言えても，逆に「日本語の論理は命題論理である」とは言えない。せいぜい，命題論理は，日本語の接続の規則を形式化したものにすぎないと思われる[5]。

２．５「英語の論理の基本は，述語の部分の論理である」か

ちなみに，「英語の論理の基本は，主体の論理である」というのは，正しいと思われるが，「述語は擬人の比喩の形式である」，「主体の論理は擬人の比喩の形式である」すなわち，「英語の論理の基本は，述語の部分の論理である」という主張は，理解できない。

月本氏が言っている「述語」というのは，「述語論理」のことと思われる。「花子は女性である」を述語論理で表現すると，「女性（花子）」になり，「象は荷物を運ぶ」は「運ぶ（象，荷物）」となる。なぜこの「述語」が「擬人の比喩の形式」となるのであろうか。「象は荷物を運ぶ」自体は，擬人の比喩でもないし，まして「花子は女性である」も擬人の比喩とは言えない。よって，「述語は擬人の比喩の形式である」という主張は誤りである。

また，英語の「A is B」では，「A と B という個体が存在し，それを is がつなぐ」から主体の論理である，と月本氏はしている。確かに，形式論理学では「A is B」を「主語論理」的に考えている。しかし，一方で，英語でも，B という述語に主語 A が包まれるという「場所の論理」で，解釈することは可能である。述語論理で書けば，「B（A）」となり，B の述語が，A の部分を包む形式になっている。中村（1989）は，「述語論理学の＜述語的論理＞のうちで述語は埋めるべき空白を含んだ一種の場所として捉えられている」と言っているが，そうだとすれば，述語論理も場所の論理に基づいていると考えられる。すなわち，図８のような「女性である」の部分が場所として捉えられ，その中に「花子」がいるという図式である。すなわち，「花子が女性という状態である」という解釈である。逆に，「主語の論理」からした解釈では，「花子の中に，女性という属性がある」という解釈で，「花子」の中に「女性」があるという図式になる。（図９）

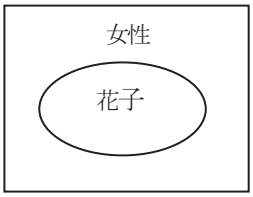

図８　述語論理の図式

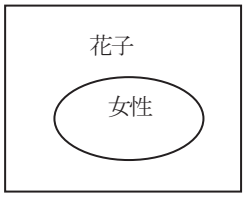

図９　主語の論理の図式

３．結論

命題論理は場所の論理に基づいている。述語論理も場所の論理に基づいているとすれば，命題論理と述語論理の複合である形式論理学も，場所の論理に基づいているのである。形式論理学自体は，主語論理的であるが，その根底では，場所の論理が働いていると言うことである。

月本氏の「日本語は論理的である」という主張は賛成である。しかし，その論拠として，形式論理を持ってくるのは疑問である。形式論理では，現実の人間の思考や推論は必ずしも取り扱えないのである。日常の推論として働く述語論理のような論理を認める必要がある。またアブダクションなどの推論や比喩的思考を述語論理の高次な形式として位置づけ論じていくことは今後の課題になる。

参考文献

浅利　誠（2001）「西田幾多郎と日本語 ―「場所の論理」と助詞」『環』Vol.4：pp.130-140，藤原書店.

――――（2008）『日本語と日本思想』藤原書店.

安藤貞雄（1986）『英語の論理・日本語の論理 ― 対照言語学的研究』大修館書店.

池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社.

大森荘蔵（1998）「思考と論理」『大森荘蔵著作集第七巻』岩波書店

城戸雪照（2003）『場所の哲学 ― 存在と場所』文芸社.

瀬戸賢一（1995）『空間のレトリック』海鳴社.

辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社.

月本　洋（2008）『日本人の脳に主語はいらない』講談社.

――――（2009）『日本語は論理的である』講談社.

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版.

中村雄二郎（1989）『場所 ―トポス』弘文堂.

米盛裕二（2007）『アブダクション ― 仮説と発見の論理』勁草書房.

注

1　米盛（2007）によれば，パースは，論理学とは，一般には命題論理と第一階の述語論理を中核とした演繹的形式論理であるが，他方では，論理学者たちが推論の概念をあまりに形式的に狭く考えすぎることを批判し，推論の概念を拡張して，新たな演繹・帰納・アブダクションの三分法の推論の概念を確立し，探求の論理学を創設したという。人工知能の分野ではすでに演繹的形式論理が現実の人間の思考や推論を取り扱うのに適していないとして，帰納的，仮説的，類比的思考などを取り入れることが始まっているのである。

2「比喩の形式」と一言で言うが，ここでは，「隠喩（メタファー）の形式」のことである。瀬戸（1995：15）では，「メタファーの形式」として，「A は B である」（「男は狼である」）のデアル型，「A の B」（「仕事の山」）の連結型，「美しい理論」のような形容詞型，「東京砂漠」の名詞型，「新しい分野を開拓する」の動詞型，「一枚岩にひびが入った」をメタファーとして使う場合の文型などに区別されるとしている。

3　月本氏（私信）では，この推論は三段論法ではなく，X＝Y のような等号で結べるものであって正しいとしている。もともと大前提が間違っているからこの推論は誤りなのであるが，実はこの推論自身は述語論理的推論であって，これが正しいとすれば，月本氏は無意識に述語論理的推論を使っていることになる。

4　確かに，「象が荷物を運ぶ」を，空間的な図式で書こうとすると難しいが，このような文でも，「運ぶ（象，荷物）」のような「述語論理」で表記できる。後で述べるように，述語論理は場所の論理に基づいているから，この文は「場所の論理」から解釈できることは可能である。

　また，このような無題文であっても，「象が荷物を運んだ」と「た」の形式にすれば文末の「た」自体が「てあり→たり→た」という変遷をたどったように，「行為が完了した事態が，現在そこにある」という空間 ― 時間的認識が認められるし，「象が荷物を運んでいる」では，「その行為が，現在そこにある」という空間的認知が表されていると考えることもできる。「象が荷物を運ぶ」というような動作動詞のスル形式は，一つの命題という形でしか述べられず，現実発話では「た」や「ている」などのアスペクト形式をとらざるをえないということは，このような文でも，「空間的把握」すなわち「場所の論理」が働いていると見ることはできるのである。テイル文のような現象文では，認知主体のいる現場においてこそ発話されるという，より広義の「場」の問題が関わってくるものと思われる。

5　論理学者，哲学者の大森荘蔵（1998）によれば，一般に，「論理とは，言語の規則に基づく」という言語規則説が，現代の記号論理学者の暗黙の常識となっているものであるという。一般に日常言語においては，どんな言語でも「かつ」「または」「でない」「ならば」の四つの接続詞は持っているのであり，それらの意味規則に基づいた論理はほぼ同一のもので，記号論理学は普遍的なものと言うことになる。一方で，言語規則説が正しいとすると，言語が違えばその言語規則も異なり，言語規則に基づく論理も違ってくるのではないか，とも考えられる。事実，そのような事例として，大森は弁証法論理や量子論理学の例を挙げている。そういう意味で，形式論理学は，近代科学の論理学であり，それは世界に相対的であるといえる。「言語が違えば論理も違う」ということからすれば，日本語の論理と英語の論理がそれぞれ違うことはありえることであり，それを否定する根拠はないと考えられる。事実，月本氏はその根拠についてはどこにも述べていない。「命題論理は日本語の規則に基づいている」ことは言えても，逆に「日本語の論理は命題論理に基づいている」という結論は導けないだろう。日本語の論理＝命題論理とする主張には形式論理学が「普遍的」に正しいという前提があるのではないだろうか。